

○西岡 大輔

神戸大学大学院 保健学研究科 准教授

京都大学大学院 医学研究科 特定准教授

筆者は、社会構造・社会環境と健康との関連性を定量的に紐解く研究を行っている。令和5年度より開始された「豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究」のアドバイザーとして調査に携わってきた。ここでは、本調査研究が果たした重要な到達および本調査研究においても垣間見えたデータ構造の課題に関して総括する。

本調査研究の強みはまず、これまで自治体内に個人のデータが多部署で蓄積されてきたにも関わらず、部署を超えて連結し応用することが少なかった市民のデータの縦割り構造に横串を刺し、対象となる市民（ここでは子ども）を一面的ではなく多面的に把握することを実現したことにある。既存の行政データだけでなく、本調査研究で独自に実施したアンケート調査が組み合わせることにより、社会人口学的なデータだけでなく、暮らしにより近いデータを収集し、行政データと突合し分析できた点も重要である。この経験を応用することで、要介護者や障害者、生活保護利用者など、公的機関でその台帳を有する集団のデータを連結し、対象者にアンケート等の調査を行うことで、市政に資するより格調高いエビデンスを創出・提示することができる。本調査研究はそのモデルケースになるだろう。

一方で、本調査研究から見えた限界・課題もある。調査対象者の無回答および脱落によるバイアスである。本研究は、学齢簿に名前のある子どもたちを対象に、公立小学校および中学校、義務教育学校で調査を実施した。しかしながら回収率は3割程度にとどまり、回答していない状況の子どもたちのことはわからない。一

般的に社会調査は社会経済的に不利な集団ほど回答が得られづらいため、本調査研究で見えた結果は回答できる余裕のある層から見える豊中市の子どもたちの結果に偏っているかもしれない。さらに、学齢簿から名前が外れる豊中市からの転出者や、私立中学校への進学者は調査対象から漏れてしまう。そのため、中1ギャップに関する研究も、公立中学校に進学した豊中市に在住し続けた子どものことしかわからない。さらに言えば、子どもたちが高校に進学、もしくは中学校卒業後に就労した場合の将来まで追跡することは現状のデザインでは難しい。これは本調査ではなく日本社会が全体として抱えている課題であり、今のままではたとえばスウェーデンのナショナルデータベースに代表されるような、一市民の健康・福祉・教育データが紐づいて追跡可能となっているしくみは構築できない。子どもの健やかな成長・発達を支援し、子どもの権利を守り、子どもの自己実現を応援し続ける未来を実現するためには、中学受験したら対象外、高校進学したら、中学校卒業後に就職したらデータがないというしくみではいけない。豊中市ならではの、これらのバイアスを乗り越えられる調査研究の実現に今後期待したい。

とはいえ、本調査研究は、調査研究における倫理的責任を公正に果たし、非常に重要な貢献をしてきた。結果を行政内部で検討する資料とただだけでなく、広く社会に公開してきた。とよなか都市創造研究所の研究員は、調査研究のプロセスや収集したデータから得られた知見を多彩な学術領域の国内学会で発表し、論文化した^[1]。また、本誌のようにオープンアク

セス化した媒体で、一般の市民、豊中市に在住していない誰であっても無料で読み、活用できる形で公開している。社会の中で不利を抱えやすい人がどのような人なのかを理解し解釈する資源（エビデンス）となるデータが公開されていなければ、いつまで経ってもその人たちのことへの理解は進まない。一方で、当事者性を抱える人も、自身のことを説明するための語彙を持たないままとなる。このような認識論的な問題を解釈的不正義と呼ぶ^[2]。さらに近年、生成AIの台頭により、入手可能なデータを根拠に推論が進められ、提案される現象が加速している。このように社会にデータがないために、その当事者のことが正しく説明されない現象はアルゴリズム的排除（Algorithmic Exclusion）と呼ばれる^[3]。これらの不正義や排除を是正するデータを広く社会に提供した点においても、本調査研究には重要な貢献があると考えら

れる。今後も、さらに子どもたちの生きる未来のために、上述の課題を乗り越えた継続的な調査研究が実施されることを願っている。

なお、アドバイザーとして関わった3年間、何よりも筆者自身はその調査プロセスや分析結果などから大いに学ばせていただいた。ここに心より御礼を申し上げる。

【引用文献】

1. 比嘉康則. こどもの Well-being と自治体データ利活用. 計画行政. 2025 ; 48(3) : 27-32.
2. Fricker, M. Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing. Oxford University Press, 2007. (フリッカー (著) / 佐藤邦政 (監訳) / 飯塚理恵 (訳) 『認識的不正義—権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』 勁草書房, 2023.)
3. Tucker, C. Algorithmic exclusion: The fragility of algorithms to sparse and missing data. Brookings (working paper). 2023. <https://www.brookings.edu/wp-content/uploads/2023/02/Algorithmic-exclusion-FINAL.pdf>